

満洲所感

Impressions during my Tour through Manchukuo

富士電機常務取締役 梶山秀男

満洲は憧れの地であつた。昨夏電氣大會に参加して之れを訪ふた。素より十日餘の短期間で團體旅行の事であるし、見た所は主に南滿鐵道沿線の大都市及其附近の工業地帯で、其れから哈爾濱、北安、齊々哈爾市を経て齊平線で南下したが、就中後半は滿鐵差し廻しの寢臺車の窓から眺めた程度であるから良く分らう筈も無い。然るに茲に滿洲所感を書くは稍々無謀の様であるが、自分の眼に映じ今尙心に残る一二を記して見たいと思ふ。

初滿洲の表玄関大連港に上陸して關東洲から南滿鐵道沿線に掛けては中々趣味あり感心させられるものが澤山ある。露西亞式大規模の大連港、日露戦役の旅順口は言ふに及ばず、瀋陽城の昔より王城の地としての奉天市でも、或は今見る國民の風俗人情でも、皆話題として面白からぬは無いが、茲は只技術方面の事のみ限定するとして先づ第一に擧げねばならぬのは、滿

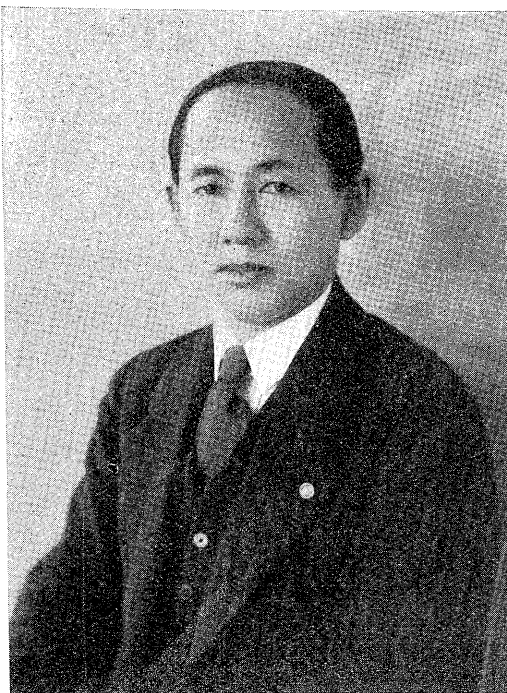
洲に於ける同胞の技術への精進であらう。而して其根幹を成して居るものは大連市にある中央試験所である。化學が主體になつて居るので自分には良く分らぬが其設備の完全と規模の大なるは、滿洲に所在する幾多の製造會社が此の試験所に於ける研究の結果から生れたと言はれて居るのでも想像が出来る。此れに従事する技師の絶へざる努力は、タールの利用、大豆高粱

より油、酒の精製、又はオイルシエールの研究等効果を擧げたものが澤山あるが、今尙懸命に資源の開発に研究を續けて居り、非常に將來を期待されて居る。之は地味な方の仕事であるが派手な方の仕事となると、昭和製鋼所がある。鞍山を中心とする大鐵鑛之れは品位が悪く選鑛困難の爲めに長らく寶の持腐れとなつて居つた。然るに十數年前同胞苦心慘膽の末鞍山式焙燒

還元法を發明し、其結果此の貧鑛の利用價值が確保されて磁力選鑛も可能となり富鑛同様に取扱はるゝに到つた。勿論焙燒法は經濟的ではないから、更に大孤山採鑛法を有利にする爲め液體酸素を用ふる等人智の限りを盡して全體として充分競争能力ある操業をなし、今日では鉄鋼一貫作業も進み、國防上に重大な役割をなして居る。此れも鞍山式還元法あればこそである。撫順炭田も亦著名なるもの一つである。

之も御承知の如く始めより今日

の隆盛を見たものではない。殘柱法で掘つて居た時代は炭層餘りに厚く不經濟で朝野の問題となつた事もあるが、後灑砂充填法を採用し更に現状の露天堀に進展して此の問題も解決したのである。技術の進む所は之に留まらない。上層の油母頁岩より低溫乾溜法で油を抽出し、其殘滓は炭坑の充填に利用し、排氣瓦斯中の窒素は硫安に、残りは燃料にと頭を百パーセントに



働かして滿洲に於ける油問題の解決に一役を承つて居る。其上に愉快なのは此の炭田の土砂運搬の大仕掛な事で、今の計畫完成の暁には世界一を誇る米人自慢のパナマ運河の土工の二倍半に達する由であるから、餘事ながら面白い事と思ふ。其他滿洲に於ける何れの事業も、技術的に見たならば以上に類する同胞の發明發見が基礎をなして居るであらう。要之滿洲には若手の技師が揃つて居る。然も制肘を受けず勇敢に手腕を振つて居る。其若き力其負けじ魂が日本技術の第一線を確保し、然も頼母しくも其線をぐんぐん押し進めて居るのである。撫順を後に北進して新京に行くとき分はころりと變る。人口五十萬の帝都の建設、大使館、大同廣場、曰く何々と眼を驚かす者も少くないが、更に內的に吾々の胸を打つものは、同胞が理想に邁進しつゝある其氣分が味はるゝ事である。

市街の建設方式、町名の附け方、曰く何年計畫等稍々現在を超越した目論見を充分着々實行に移さんとして居る。統制も其一つである。特に電氣關係にあつて統制された最大のものは滿洲電業會社の仕事で百に近い會社を合同して周波數を定め送電網の電壓を制定し料金迄も協定して産業の發達に便し、全滿電化五ヶ年計畫を樹立し、火力より水力に、更に進んで朝鮮と結び北支と手を握らんとする等規模宏大である。問題には是非の議論もあるが大局より見て將來は兎も角現在に於て統制なくして此れ丈の案を立て實行に移す事が出来ようか。

滿洲電信電話會社も亦理想的の統制をなして居る。

日本全土の二倍半の廣さを有し、住民は日鮮漢滿蒙五族、言語風俗を異し、之れに加ふるに國外との交渉亦等閑に附し難き國柄である。而も今迄は頗る不完全な設備しか無かつたので、急に通信網の改善増設、電話自動化、電信文字の制定等頭を要する事のみである。此れ亦區々の議論を許さない。

此等電氣並に通信事業以外にも統制を目論まれて居るもの四十幾種に上るが、要は倚る處を定めて國や人の仕事の能率化を計るのである。大に歡迎して理想邁進を助成せねばならぬ。

新京より北に北滿南部線に入れば、既に南滿とは其趣きを異にする。哈爾濱を越へて濱北線、齋北線に到れば、文化は逆轉し、開墾地は減じて廣漠たる平原となり、或は濕潤せる沼地となり、時には氾濫せる河川となり、停車場には銃眼鐵條網あり、驛の附近には將卒の墓標の尙新たなるを見る。善政及ばず未開凄慘を感ず。鐵路に沿ふ小丘には劍銃の兵卒の立てるあり。此の寂寥の地に艱苦困餓を忍び、己れを忘れて其責を果す此等將卒の勇や感激の外はない。

斯く滿洲を視て、技術に精進し理想に邁進し或は文化の北進に生命を賭せる同胞を思ふ時、帝都に住んで安逸に暮す吾々も各其職責に應じて粉骨碎身最善を盡し、前線に活動さるゝ同胞に何物かを提供すると共に、滿洲への認識の助成に微力を致さねば相濟まぬと思ふ。

富士時報滿洲號を出すも亦之の主旨に外ならぬ。



*本誌に記載されている会社名および製品名は、それぞれの会社が所有する
商標または登録商標である場合があります。